

「森銑三刈谷の会」だより 52(2026/5/16)

発行 2026/5/16 (月刊・メールでの投稿歓迎)
例会 第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館 参加自由

バックナンバー 刈谷市中央図書館>森銑三刈谷の会
共同代表 神谷磨利子・鈴木 哲 tetsu_s@katch.ne.jp

52:2026/4/18(土) 森銑三 (1934年)「黄表紙作家としての唐来三和」～『再会親子銭独楽』(寛政5年、出版つたや)を読もう No.5、〈関連〉森三郎「めぐりあひ」『赤い鳥』(1934.8) (参加13人)

森三郎「めぐりあひ」は優れた童話

神谷 磨利子

「森銑三刈谷の会」だより48で紹介したように、森銑三の「黄表紙作家としての唐来三和」が『歴史と国文学』に掲載されたのは1934年2月-5月号である。同年8月号の『赤い鳥』に森三郎は「めぐりあひ」を発表した。兄銑三の論文の影響を受けて、書かれた作品である。「めぐりあひ」でも『再会親子銭独楽』と同様に、四文銭が本来の通貨としての役割とそれ以外の様々な使われ方をしている。

読み合わせの最終回として二つの話の場面比較をした。『再会一』が母子の三種の銭の話であったのに対して「めぐりあひ」は兄弟の銭の話であり、旅の場面は兄の四文銭の体験談としてまとめられている。「めぐりあひ」では、たらいの底の焼き印にされ黒やけになった四文銭が、歯磨きの効能役として磨かれたりヤニを付けられたりを繰り返した後、灯心押さえの代わりにピカピカになる過程が具体的に描かれている。展開が明瞭である。

面白いことに、話の発端で、両替商の娘が風鈴のペロとしてもらった四文銭は兄に横取りされ、その勢いで四文銭は二階の窓から路地に落ちる。最後には四文銭は元の両替商に戻り、娘の手に渡る。まるでアンデルセンの「スズの兵隊」(1838)の運命のようである。この二つの童話は無生物を擬人化し命を与えられている点も共通している。三郎は鈴木三重吉の訳した「一本足の兵隊」(『赤い鳥』1919年5月号)を子どもの頃(小学校3年)読んでいた。

「めぐりあひ」は黄表紙『再会親子銭独楽』を下敷きにしてはいるが、三郎は黄表紙を子どもたちに紹介するだけでなく、童話としてまとめたかったのだろうと、今回改めて童話作家森三郎の力を感じた。

貨幣タイトルの文学と森銑三「今一人の江戸川乱歩」

鈴木 哲

唐来三和(1793)『再会親子銭独楽』、森三郎(1934)「めぐりあひ」から、貨幣タイトルの双璧、江戸川乱歩(1922)「二銭銅貨」と松本清張(1951)「西郷札」を連想した。ともに著名な推理(探偵)小説作家デビュー作である。

貨幣タイトルの文学は他に芥川龍之介(1924)「十円札」、小川未明(1933)「一銭銅貨」、太宰治(1946)「貨幣」、川端康成(1946)「五十銭銅貨」がある。

乱歩といえば青柳碧人(2025)『乱歩と千畝: RAMPO と SEMPO』新潮社と芦辺拓・江戸川乱歩(2024)『乱歩殺人事件: 「悪霊」ふたたび』KADOKAWAは近年の傑作である。芥川(1924)と青柳(2025)に「電気ブラン」が登場するのは、瑣末にして意外な発見である。

森銑三では「今一人の江戸川乱歩」がある(著作集(1974)12)。手を挙げる人がいない回があれば「森銑三「今一人の江戸川乱歩」辻村義介はいなかった」という〈自身解決〉ミステリを紹介したい。

追補 杉浦日向子の「四文銭」

杉浦日向子(2016)「江戸の、時間感覚・金銭感覚」『江戸を愛して愛されて』河出書房新社に四文銭があった。面白いので紹介する。

銭形平次親分がクライマックスで投げる、青海波文様の穴あき硬貨は四文銭。「四文屋」という屋台は、煮もの揚げもの焼きもの、なんでも一つ一コイン(四文)で売りました。[略]早起きしたとてたかが三文、「四文屋」の一つも買えやしない。それなら、ぬくぬく寝坊したが得というもの。

「江戸の一」は赤瀬川ほか(2018)『お金がない!』河出書房新社で知った。太宰(1946)「貨幣」もここにあった。

名作漫画の趣を楽しむ

神谷 明子

はじめに、黄表紙と解説のコピーを持参しなかったことを悔やんだ!帰宅してもう一度ざっと目を通した。黄表紙は、文字は私には読みづらかったが、絵には、名作漫画の趣があつて分かりやすかった!江戸の庶民の風俗、暮らしぶり、言葉使いなどが、わかり、楽しめた。三郎さんの「めぐりあひ」は、四文銭が、江戸から島田宿まで旅して江戸に戻り、元の両替屋に戻るという不思議な話だが、人生を旅にたとえた面白さがある。途中の出来事に思わず笑ってしまう。子どもでも十分理解できて、楽しめると思った。私たちも順に部分読みしたが、内容を把握できるし、次は誰?と緊張しながら、待つのも楽しい。子ども時代に帰って若返った。『再会親子銭独楽』と『めぐりあひ』の2作を比較するという試みも新しい感じがして、よかった。

(裏面へ続く)

楽しめた一連の会

河橋 育実

「森銑三刈谷の会だより」48(2026/1/17)に載せて頂きましたが、三郎さんの「めぐりあひ」は好きな作品のひとつです。

その元の黄表紙「再会親子銭孤楽」を会で読みました。そして三郎さんの「めぐりあひ」も会で読みました。読み比べをして黄表紙から拝借しているところと三郎さんが独自に考えたところが良く分かりました。両方ともハッピーエンドなので、読み手の私もハッピーになりました。

どちらのお話の中でも銭を耳に挟んでいる場面がありましたが、子どもの頃近所のお爺さんがキセルやら何やらを耳に挟んでいたのを思い出しました。

とても楽しい一連の会でした。ありがとうございました。

予定

53：2026/05/16(土)：3階第1会議室：『「再会親子銭独楽」を読もう』No6、David Dykes 〈関連〉坪内逍遙「十銭銀貨の来歴談」(1900)他/Joseph Addison "The Adventures of a Shilling" (1710)他

54：2026/6/20(土)：「森銑三「今一人の江戸川乱歩」辻村義介はいなかった」

55：2026/7/18(土)：募集中、お申し出ください。

8月は休会。

56：2026/9/19(土)：募集中、お申し出ください。
